令和7年度版「学力向上ポートフォリオ（学校版）」【大谷口中学校】

① 今年度の課題と学力向上策

	学習上・指導上の課題		学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	＜学習上の課題＞ 基礎的・基本的な知識・技能の習得状況が目標に達していない。 ＜指導上の課題＞ 各教科の授業内で基礎・基本事項の反復練習の時間を充分に確保できていない。	⇒	自校のチャレンジカップ（基礎・基本に特化した一問一答テスト）を行う。【年4回（定期テスト前）5教科で実施】 生徒にとってわかりやすい授業のため、授業におけるICTを活用し、ポイントをしぼった授業展開を行う。【毎回】 スタディサプリを活用した宿題を計画的に配信する。【週に1回配信】
思考・判断・表現	＜学習上の課題＞ R7年度さいたま市学習状況調査「生活習慣に関する調査」における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」の質問において、R6年度の自校の値を維持すること。 ＜指導上の課題＞ 「自力解決」と「協働解決」の学習時間を授業内で充分に確保できていない。	⇒	生徒が課題に取り組む際、評価の観点を教師が明示し、つまずきに対して個に応じたアドバイスを行う。【毎回】 「深い学びの実現」を図り、「自力解決」と「協働解決」の学習時間を授業内で充分に確保する。【毎回】

② 全国学力・学習状況調査結果について（分析・考察）

知識・技能	国語では、埼玉県の正答率と比べると大きな差はなく、無解答率も低い。数学では、埼玉県の正答率を上回っている問題もある一方で、相対度数の問題で無解答率が高くなっている。 自校のチャレンジカップや授業等で基礎基本の問題に繰り返し取り組んでいる成果が表れ、生徒に定着している部分もあるが、まだ不十分な部分もあることがわかる。これらについて共通理解を図り、チャレンジカップやスタディサプリ等を活用しながら、定着していない部分の練習を反復して取り組ませていく。
思考・判断・表現	国語では、特に「読むこと」「書くこと」に課題が見られ、埼玉県の正答率を下回るとともに無解答率も30%程度と他の問題よりも高くなっている。数学でも知識・技能を問う問題と比較すると、埼玉県の正答率を下回っている問題が多く、無解答率も高くなっている。 「読むこと」は全教科の学びの根幹になる部分であり、「書くこと」もどの教科でも必要な力になるため、自力解決と協働解決の時間を授業の中で意図的に確保していく。教科に関係なく「読むこと」の大切さを教師が再認識し、「読む」際にどこでつまずきが起きているかを把握しながら授業を展開していく必要がある。

③

	中間期報告		中間期見直し
	評価（※）	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	A	チャレンジカップは一学期期末テスト前に実施できた。 二学期以降も定期テスト前に実施していく。 スタディサプリも学年によって配信方法は異なるが、少なくても週に一回は配信できている。 ICTの活用に関しては、頻度を増やすことはできているため、より効果的な活用につながるよう継続していく。	変更なし
思考・判断・表現	B	評価の観点を示してから課題に取り組ませること、個に応じたアドバイスを行うことは意識して実践できている。 しかし、「自力解決」と「協働解決」の時間確保は今後もより意識していく必要がある。	変更なし

※評価　A 8割以上（達成）B 6割以上（おおむね達成）C 6割未満（あと一歩）

④ さいたま市学習状況調査結果について（分析・考察）

知識・技能	[国語][数学][社会][理科]の全てにおいて、さいたま市の平均正答率と比べると課題がある。特に[国語]の「我が国の言語文化に関する事項」、[数学]の「関数」、[社会]の「世界と日本の地域構成」、[理科]の「エネルギーを柱とする領域」ではより課題がみられた。しかし、[国語]の文法や歴史的仮名遣いに関する設問や[理科]の動物のからだに関する設問はさいたま市の平均を上回っている。これは自校で実践しているチャレンジカップやスタディサプリ等で取り組んできている知識・技能の問題であるため、更に効果的に活用し、今後さらに上昇できるよう支援を行っていく必要がある。
思考・判断・表現	[国語][数学][社会][理科]の全てにおいて、さいたま市の平均正答率と比べると課題がある。特に[国語]の「読むこと」、[数学]の「数と式」、[社会]の「世界の様々な地域」、[理科]の「粒子を柱とする領域」ではより課題がみられた。しかし、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」の質問において、すべての学年でさいたま市の肯定的な回答を上回り、95%以上の数値となっている。これは「自力解決」と「協働解決」の学習時間の確保による成果と捉えられるとともに、更に資料の読み取りや文章と図表等を結び付けて考えさせること等を授業の中で意図的に実践して、各教科の課題を向上させていく必要がある。

⑤ 学力向上策の実施状況

	評価（※）	
知識・技能	A	チャレンジカップは年4回定期テスト前に実施することができた。 スタディサプリも学年によって配信方法は異なるが、計画的に配信することができ、基礎・基本事項の反復練習の時間確保の一助とすることができた。 ICTの活用は、使用頻度は確実に増えてきている。校内研修と関わらせながらより効果的な活用につながるよう実践を継続していく。
思考・判断・表現	B	評価の観点を示してから課題に取り組ませること、個に応じたアドバイスを行うことは中間報告以降も意識して実践できている。また、「自力解決」と「協働解決」の時間確保は中間報告以降、より意識して実践してきた。 そのため、さいたま市学習状況調査「生活習慣に関する調査」における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」の質問において、肯定的な回答をしている生徒の割合95%を維持できたことも評価できると考える。しかし、より意図的・計画的な「自力解決」と「協働解決」の時間確保を実践していく必要がある。

※評価　A 8割以上（達成）B 6割以上（おおむね達成）C 6割未満（あと一歩）

⑥ 次年度への課題と学力向上策

知識・技能	当該学年で学習する①漢字の読み書き②計算式③英単語の読み書き④理科・社会の重要語句等を習得させるために、自校のチャレンジカップ、「スタディサプリ」や「ドリルパーク」等のICTを活用した課題の意義・運用方法を学期ごとに再考し、意図的・計画的に提示する。 生徒の家庭学習に併せて、各教科の授業内で基礎・基本事項の助言や反復練習の時間を充分に確保し、達成感や成就感を向上させる。年度当初の各教科会にて、前述の指導事項の計画を立案する。
思考・判断・表現	さいたま市学習状況調査「生活習慣に関する調査」における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」の質問において、肯定的な回答をしている生徒は令和5年度、令和6年度、令和7年度と95%と高い数値となっているため、令和8年度の自校の値を維持していくことを課題とする。そのために、課題に対する「評価の観点」を教師が明示し、「指導と評価の一体化」を実現する。「自力解決」と「協働解決」の学習時間を授業内で充分に確保できるよう、毎学期の教科会で「深い学びの実現」を図るための手だてを検討する。

令和6年度版「学力向上ポートフォリオ（学校版）」【大谷口中学校】

① 今年度の課題と授業改善策

	学習上・指導上の課題		授業改善策【評価方法】
知識・技能	<学習上の課題> 基礎的・基本的な知識・技能の習得状況が目標に達していない。 <指導上の課題> 各教科の授業内で基礎基本事項の反復練習の時間を充分に確保できていない。	⇒	自校のチャレンジカップ（基礎基本に特化した一問一答テスト）を行う。【年4回（定期テスト前）5教科で実施】 生徒にとってわかりやすい授業のため、授業におけるICTを活用し、ポイントをしぼった授業展開を行う。【毎回】 スタディサプリを活用した宿題を計画的に配信する。【週に1回配信】
思考・判断・表現	<学習上の課題> R6年度さいたま市学習状況調査「生活習慣に関する調査」における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」の質問において、肯定的な回答をしている生徒は令和5年度、令和6年度ともに95%と高い数値となっているため、令和7年度の自校の値を維持していくことを課題とする。そのために、課題に対する「評価の観点」を教師が明示し、「指導と評価の一体化」を実現する。「自力解決」と「協働解決」の学習時間を授業内で充分に確保できるよう、毎学期の教科会で「深い学びの実現」を図るための手だてを検討する。 <指導上の課題> 「自力解決」と「協働解決」の学習時間を授業内で充分に確保できていない。	⇒	生徒が課題に取り組む際、評価の観点を教師が明示し、つまずきに対して個に応じたアドバイスを行う。【毎回】 「深い学びの実現」を図り、「自力解決」と「協働解決」の学習時間を授業内で充分に確保する。【毎回】

② 全国学力・学習状況調査結果について（分析・考察）

知識・技能	国語では「言葉の特徴や使い方に関する事項」において、特に「文の成分」の理解を問う問題に課題がみられた。また、「漢字」の書く問題に対する無解答率が一番高くなっていることも課題であると捉えている。数学では「関数」の領域において、知識・技能を問うグラフの問題に課題がみられた。 チャレンジカップでは、課題となっている漢字や基本的な計算問題の出題をしている。文法やグラフの問題を意図的に出題し、基本的な知識の定着を目指して、引き続き取り組んでいく必要がある。また、スタディサプリを活用して課題となる部分に関する宿題を計画的に配信していく。
思考・判断・表現	国語では「読むこと」において、特に「文章と図の関係」を読み取ることや「短歌」の読み取りに課題がみられた。数学では「説明する」問題や「証明する」する問題に課題が見られた。また、知識・技能を問う問題と比較すると明らかに無解答率が高い。 教科に関係なく「読むこと」の大切さを教師が改めて認識し、「読む」際にどこでつまずきが起きているかを把握しながら授業を展開していく必要がある。

③

	中間期報告		中間期見直し
	評価（※）	授業改善策の達成状況	授業改善策【評価方法】
知識・技能	A	チャレンジカップは一学期期末テスト前に実施できた。二学期以降も定期テスト前に実施していく。 スタディサプリも学年によって配信方法は異なるが、少なくても週に一回は配信できている。 ICTの活用に関しては、頻度を増やすことはできているため、より効果的な活用につながるよう継続していく。	変更なし
思考・判断・表現	B	評価の観点を示してから課題に取り組ませること、個に応じたアドバイスを行うことは意識して実践できている。 しかし、「自力解決」と「協働解決」の時間確保は今後もより意識していく必要がある。	変更なし

※評価　A 8割以上（達成）B 6割以上（概ね達成）C 6割未満（あと一歩）

④ さいたま市学習状況調査結果について（分析・考察）

知識・技能	[国語][数学][社会][理科]の全てにおいて、さいたま市の平均正答率と比べると課題がある。特に[国語]の「話すこと・聞くこと」、[数学]の「一次関数」、[理科]の「エネルギーを柱とする領域」ではより課題がみられた。しかし、[理科]の「生命・粒子を柱とする領域」においてはさいたま市の平均正答率を上回る結果となった。本校の課題である「家で自分で計画を立てて勉強をしている」生徒はさいたま市の平均を上回り65%以上の結果となった。チャレンジカップやスタディサプリ等を効果的に活用し、今後さらに増加していくよう支援を行っていく必要がある。
思考・判断・表現	[国語][数学][社会][理科]の全てにおいて、さいたま市の平均正答率と比べると課題がある。特に[国語]の「読むこと」、[社会]の「世界の様々な地域」ではより課題がみられた。しかし、[社会]の「日本の様々な地域」においてはさいたま市の平均正答率とほぼ同等の結果となった。「自力解決」と「協働解決」の学習時間確保とともに、資料の読み取りや文章と図表等を結び付けて考えさせること等を授業の中で意図的に実践して、各教科の課題を向上させていく必要がある。

⑤ 授業改善策の達成状況

	評価（※）	
知識・技能	A	チャレンジカップは年4回定期テスト前に実施することができた。今年度は5教科満点者だけでなく4教科満点者の掲示も行い、生徒の意欲的な取組につなげることができた。 スタディサプリも学年によって配信方法は異なるが、計画的に配信することができ、基礎基本事項の反復練習の時間確保の一助とすることができた。 ICTの活用は、使用頻度は確実に増えてきている。校内研修と関わらせながらより効果的な活用につなげるよう実践を継続していく。
思考・判断・表現	B	評価の観点を示してから課題に取り組ませること、個に応じたアドバイスを行うことは中間報告以降も意識して実践できている。 また、「自力解決」と「協働解決」の時間確保は中間報告以降、より意識して実践してきた。そのため、さいたま市学習状況調査「生活習慣に関する調査」における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」の質問において、肯定的な回答をしている生徒の割合95%を維持できたことも評価できると考える。しかし、より意識的・計画的な「自力解決」と「協働解決」の時間確保を実践していく必要がある。

※評価　A 8割以上（達成）B 6割以上（概ね達成）C 6割未満（あと一歩）

⑥ 次年度への課題と授業改善策

知識・技能	当該学年で学習する①漢字の読み書き②計算式③英単語の読み書き④理科・社会の重要語句等を習得させるために、自校のチャレンジカップ、「スタディサプリ」や「ドリルパーク」等のICTを活用した課題の意義・運用方法を学期ごとに再考し、意図的・計画的に提示する。生徒の家庭学習に併せて、各教科の授業内で基礎基本事項の助言や反復練習の時間を充分に確保し、達成感や成就感を向上させる。年度当初の各教科会にて、前述の指導事項の計画を立案する。
思考・判断・表現	さいたま市学習状況調査「生活習慣に関する調査」における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」の質問において、肯定的な回答をしている生徒は令和5年度、令和6年度ともに95%と高い数値となっているため、令和7年度の自校の値を維持していくことを課題とする。そのために、課題に対する「評価の観点」を教師が明示し、「指導と評価の一体化」を実現する。「自力解決」と「協働解決」の学習時間を授業内で充分に確保できるよう、毎学期の教科会で「深い学びの実現」を図るための手だてを検討する。